エピローグ

京都駅を離れる列車の窓の夜景に、私は母と祖母の顔を思い浮かべた。幼い頃の京太や幹夫の顔が浮かんだ。兄貴と父が口論する姿が浮かんだ。母にテープコーダーを買ってもらい喜ぶ京太の顔があった。あのテープコーダーは京太のものだったが、私が一番使っていた。あれは、母の大昔の知人からの贈り物で、父と母の不和の原因のひとつでもあった。

その知人は母の昔の恋人で、母が例の音楽喫茶店で働いていた頃京都帝国大学の学生だった。学徒動員で兵役に取られ、戦中戦後の混乱で音信途絶え、神戸の彼の実家も空襲で灰となり、母はあきらめて、親類の進めるままに私の父と結婚した。父は母と幼い兄と京太と私の四人を残して病死し、母は再婚。末っ子の幹夫が生まれ、生活は安定し、あたかも、これで幸せな暮らしが続くかの様に見えた時、テレビの普及で父の映画の仕事が芳しくなく、母は家に金を入れぬ父をいつもなじった。

その時代の流れの中で、母は昔の恋人と再会している。「息子さんへの贈り物」として、当時、金のなかったわが家に高価なテープコーダーが舞い込んで来たのはその時だった。兄が京都大学に入学したときの母の喜びは特別なものがあっただろう。そう言う状況も知らず、当時の私は自分中心の世界に住み、一人、恋の悲劇の主人公の様に、自分の失恋をドラマ化して、それをきめ細かく日記帳に書き記していた。

小田原駅でひかりを降りて、小田急始発の各停に乗り換えて家に着いたのは十時前だった。私は台所で遅い夕食を取り、その時、妻に日記を見せた。妻はあまり関心を示さず、私はその日記を居間の本箱の引き差しの片隅に押し込んだまま、忘れていた。今年一月十七日の阪神大震災のすぐ後、東京で、高校時代の同窓会があり、海外赴任が解けて、久々に帰国した安田に会った。小学校の同窓会があり、彼女に会ったと私に告げた。私の話題も出たと言う。もう、皆、初老に入り、昔を懐かしむ歳になった事を嘆きながら酒を飲んだ。私は同窓会から戻り、忘れていた日記の事を思い出し、六年ぶりに手に取って見た。

Candy
in the Heart
613

萩原良昭